

子どもと青年，家族が遭遇した複合災害
—語ること・語らないこと，聴くことの意味—
Compound Disaster and Its Impact On Children,
Youths and Families

横湯 園子

YOKOYU, Sonoko

はじめに

東北を襲った地震と津波が原発事故・放射能汚染へと玉突きのように起き広がっていく現実を前にして、私は体が硬直、思考は止まっていると同時に全回転しているという状態に陥りました。

東北とは不登校やひきこもりの親の会、若者支援のNPOなどに関わっている専門職の方々とのつき合いを中心に、30年近いつき合いになります。断続的とはいえ、相談やカウンセリングなどで関わってきた家族や子ども・青年もいました。

まず連絡がついたのは岩手県内の若者の自立支援のNPOの人たちでした。即カウンセリングというよりも、義援金集めの相談をし、求められていることの中で、私にできることを問いながら動いてきました。もちろん、一人の心理臨床家として子ども・青年のカウンセリングや子ども・青年に関わっている職種の方々のご苦労にもつき合いました。

現在は「ひきこもりの時代」といわれています。東北だけでなく、カウンセリングしてきた多くの子ども・青年がこもっていく背景に、いじめ・暴力被害がありました。友人の甥は「これだけ悩んだのだから、もう、いい」と逃げることを拒み、一緒にいた家族数人も亡くなったといえます。また、別の友人の同じくひきこもっていた次男は、「誰にも会

たくない」と最後まで部屋を出ず、あっという間に津波が押し寄せ、友人も次男も流されてしまいました。強い地震に驚いて外に飛び出したのをキッカケに動き出したひきこもりの青年にも会いましたが、私は悲しみをもって、「これは社会災だ」と思いました。3.11は社会災を加えて、天災、人災、文明災（梅原猛）、社会災の複合大震災であることを強調したいと思います。

ところで、3ヶ月弱頃から、被災者の方々が、身体的にも精神的にきつくなっているのが伝わってきました。同じ頃、首都圏の青年の中にも過去の心的外傷などがフラッシュバックして、混乱、危機状態に陥っているという緊急対応を要する相談が入るようになりました。3.11以降の心の傷や諸症状について、心的外傷・トラウマ、PTSDの用語をつかって話されることが多いですが、一般には、それがどんな症状をもつどんな障害なのか正確に分かっている人は意外と少なく、偏見的、差別的な眼差しが気になりました。

その意味でも本稿をつらぬいているのは、心に傷を負った人たちの癒しについてであり、語ること・語らないこと、聴くことの意味を考える視点も同じです。一部、プライバシーの保護を危惧して、地域名をあげることを避けました。

1 社会災とは一波にのまれて逝った青年たちとその家族

波にのまれて逝った友人や知人とその家族

3月23日時点で、津波に流され死亡、行方不明になっている友人、知人について知らされました。

自宅を被災者やボランティアの連絡場所に提供し、自身も救援活動に身を呈していた宮古の元高校教師の友人も身内を数人亡くしていました。前述したように、その友人のひきこもっていた甥は「これだけ悩んだのだから、もう、いい」と逃げるのを拒み、一緒にいた家人数人が亡くなったということでした。友人は「家族は彼のひきこもりを理解していたのに」と苦しんでいました。友人は心臓の手術後の傷が傷んでいました。電話で「オレ、傷口が痛む。床に入って休まないといけないうる状態ではない」と切なそうでした。思いついた私のアイデアは「押し入れだったら言い訳しないで眠れる。お手洗いを済ませてペットボトルを持って、というのはどう？」でした。3ヶ月経った頃でした。「何も残っていない更地をみるのもつらい。あそこには何があった、ここには誰が住んでいたと思うとつらい」と話しているうちに涙声に。「オレ、初めて泣けた。ありがとう」と電話を切りました。

「誰にも会いたくない」と最後まで部屋を出なかった次男と流されて逝った友人のようすをもう少し詳しく記そうと思います。あつという間に津波が押しよせ、友人は逃げる準備をしていた長男と2人で住民が退避した民家に逃げ込みました。長男は天井に頭突で穴を開け、母親の手をとって屋根の上によじのぼったそうです。でも家ごと沖に流され、力つきた友人は「1人だけでも生き残って、強く生きて」と手を離し、波にのまれていき、長男は気を失って波に浮かんでいるところを発見・救出されます。次

男は遺体で発見され、友人は行方不明でした。小学校校長であったご主人は下校前の生徒たちを護り、学校は避難所になりました。

手紙のやり取りも含めて断続的ではありましたがカウンセリングをしていたK一家は全員が亡くなっていました。もう一人、3.11の前の秋に、講演その他で何かとお世話になった役所の女性が亡くなっていました。

大震災から1年余、4度目の被災地訪問の主な目的は、主として、津波にのまれて逝った友人や知人のお位牌にお会いすることでした。

訪れる地、訪れる地で集まってきてくれる親や青年たちの姿に「また、会えてよかった」と言葉につまる私でした。病院関係者の死亡について、「私が相談の約束をしていなければ逃げるのに間に合っただけ。私、ずっと、気がふれたようになっていた」「先生、会いにきてくれてありがとう。つらかった」と泣き伏す人もいました。

消息のわからなかった少女一家と再会することもできうれしかったのですが、この回は総じて、死者への旅となりました。K一家の寺も墓石も流され菩提先もわからず、私の気持ちを蒼い空に託して去りました。それだけに、友人とその次男の遺影とお位牌の前に座ったときは安堵しました。

ひきこもりの定義、その数、背景に横たわっているもの

ところで、ひきこもりは症状であって病名ではありません。日本では、不登校・登校拒否状態にある子どものうち、対人接触を頑なに拒否するケース、あるいは義務教育年齢以降の青年期における社会的ひきこもりの長期化が問題になっています。

本人が相談や医療の場に現われない、あるいは訪

問による面接を拒否することが多いことから、医療機関や相談機関において積極的な支援の対象となりにくく、家族が適切な支援を受けられないまま、長期化するという現状にありました。

アメリカ精神医学会による診断・統計マニュアル、DSM - IV（1994）では社会恐怖、外傷後ストレス障害、回避性パーソナリティ障害、気分変調障害、分裂病質人格障害他などにおいて、長期にわたるひきこもりをきたすケースがあると報告されています。

診断的にはそのように見えますが、なぜ、日本では、そのような子どもや青年が増えているのでしょうか。戦争がなければ戦争神経症がないように、ひきこもりは「今」という時代の日本社会と学校、その影響を受けた家庭のあり方を反映した問題の結果であると見るのが妥当なのではないでしょうか。

私がカウンセリングしてきた多くの子ども・青年の背景にいじめ暴力被害がありました。家にこもるという形で、命を護ってきた子ども・青年たちです。

その後も「仮設住宅の子どもたちの中に不登校児が増えている」「経済状況の悪化で就職が決まらず、社会復帰が進みづらく、ひきこもりが高齢化している」「生活の支援だけでなく、心のケアが求められている」などの連絡がきましたが、その数・実態はわかりません。私は悲しみと怒りをもって「これは社会災だ」と思いました。

震災孤児、親を失った子どものカウンセリング

話は前後しますが、2回目は福島から入って、可能な限り、原発事故現場近くまで車を走らせ、津波で壊滅した海岸地帯を北上しました。

無人地帯に点在する瓦礫は雑草に覆われはじめていました。地球の色であるはずの緑の色が、この地では絶望と無常観を増す色に。私は地球と人類に未

来はあるのだろうかという絶望感におそわれて、立ち尽くしていました。

その翌日、震災孤児や親を亡くした子どもを含めた学童保育の小学生たちのカウンセリングのために目的地に向かいました。指導員の先生たちの被災状況も三者三様でした。子どもたちに会う前に、子どもたちの被災状況と個別の困難内容と気になること、私は何を期待されているのかなどについて打ち合わせを行ないました。とにかく、正確な情報把握が大事でした。

親を失った子ども以外にも多様な相談を受けましたが略します。人物像がにじみそうなので地名も略します。

災害時の心のケアは初めての私ですが、情報理解さえまちがっていなければ、後は場の雰囲気と流れに身を任せ、私なりのやりかたでいこうと思いました。

正式に紹介される間もなく、30名弱の子どもたちの中に入ることになってしまいました。子どもたちは私がカウンセラーであるということを知らないようですが、指導員の先生たちの判断に従いました。

子どもたちが一斉に駆け込んできました。学校の道具を所定の場所に置いてうろつく子どもたちの姿を見ながら、「〇〇ちゃんは、どこ？」などと確認し、不自然にならないように話題にのぼらなかった子どもたちの近くに座り、間合いをみて、話題にのぼった子どもたちのいる場所へと動きました。

側に座るだけでは視線が上過ぎる。そう思った私は半分寝転ぶような姿勢でブロックや積み木遊びをする子どもたちに身を添えていました。その日、私は言葉らしい言葉はおろか声をだしませんでした。子どもたちは私を自然に受け入れてくれたようでした。

ところで、行方不明の母親の遺体を何日もかけて見つけ出したという少女はメディアのカメラに向けて「写さないで!」と、母親の遺体に身をかぶせるようにして叫んだそうです。その話をする指導員の声が震えていました。

その少女はいませんでした。両親・姉・祖父母の全員が死亡という震災孤児のA君。学校に迎えにきた母親の運転する車が津波にのまれ、母親は遺体で、妹は波間に浮いているところを救出。遺体から離れようとしなくてヘリコプターに乗るのを拒んだというB子ちゃん。2人の姿は直ぐわかりました。

子どもたちは申し合わせたようにブロック・積み木で2階建ての家をつくり、2階へハシゴを架け、船に綱をかけ柱にむすんでいましたが、家が半壊、全壊していても家族が無事だった子どもと親を失った子どもでは「ハシゴ架け」への真剣度がちがっていて、家族が無事だった子どもたちはグループも流動的で次の遊びに見合った群れを作りますが、A君とB子ちゃんの2人は「ハシゴ架け」の場から動きません。

子どもたちは私がカウンセラーであることを知らないはずなのに、私が2人の側にいられるように配慮しているのではないかと感じることもありました。特に孤児になってしまったA君は私の側を離れません。亡くなった母親が祖母に似ていたのでしょうか。

2人はハシゴ架けに失敗する度に茫然となってしまうのです。何度、手をかしたいと思ったことか知れません。私は治安維持法の下で亡くなった父、母から離れなかったと言う幼女の頃の私、沼津大空襲から一夜明けた翌日、累々とした焼死体の間を母親を捜している少年の姿や壊滅状態の福島で出合ったお線香姿の父子の姿がマーブルのようになって、「今、私はここにいる」と思いながら、心の中

で「ハシゴは自分で架けるのよ」と話しかけていました。

時折、事務机からそっと様子をみている指導員に打ち合わせ時に話題に上がった子どもたちの様子を伝えて戻るなど、どれくらいの時間が経ったでしょうか。A君が「オレ、わかった」と私の耳元で囁きブロックを見せるではないですか。うなずく私。ようやく頑丈なハシゴが架かったその直後であった。B子ちゃんが、泣いてばかりいるA君に「泣くな。弱虫。泣いてもかえって（還って）こねえぞ」と言うではないですか。彼女の横顔の何と凜としていたことでしょう。素直にうなずく彼。会話はこれだけでした。

そっと、2人から離れてその様子を指導員に伝えました。一時期、マスコミは「泣けば楽になる」の言葉を流し続けていましたが、その誤りを痛感した場面でもありました。

夕暮れになって宿に引き上げる時間になりました。「先生、今度はいつ来てくれますか」の指導員の問いに手帳を出しながら、「この週もダメね。この月は仙台だわ」とモソモソしている私の頭の後ろから、『また来るね』というヤツは来ねえ』という声がするではないですか。私の近くには決して寄ってこなかった年嵩の少年2人が手帳をのぞいていました。

この時も中井久夫氏の「忘却こそ被災者の危機」『誰かいてくれる』だけで意味があるを思い出しました。軽々と空返事をしないでよかったとぞっとすると同時に、必ず来ようと思いました。

次の訪問はかなり後になり、子どもたちの状況にも変化がありましたが、多くの子どもたちが覚えてくれていて、一斉に学校の宿題を手伝わせるではありませんか。B子ちゃんは遠くからフラフープダンスをしてみせてくれました。A君はこの日も、最後

まで私から離れず、私は宿題だけでなく予習も手伝いました。前回と同様の囁くような声で、耳元で歌をうたってくれた。「何のお歌？」とたずねると、曲名ではなく短い言葉で、つらい心の内を話してくれました。あまりにつらい心傷む話で、この回も祈りの回となりました。

2 実感したこと・語ること・語らないことの先にあるもの

死者への旅

長男の手を離して津波にのまれて逝った友人のご主人は、お位牌の前で、妻の遺体確認までを話しながら、「長男の夢には妻が出てきたのに、私には出てこない。幽霊でもいいから出てきてほしい」とおっしゃいました。じっと私の顔を見つめている長男の夢が外傷性の夢でないことを願ったのでした。手を離して波にのまれて逝った母親の姿や光景は幾度となく思い出さずです。生き残った罪悪感はどうのように癒されるのでしょうか。

妻、娘、孫を失った男性の住む仮設住宅を訪問した時もそうでした。夏祭り姿の孫の写真を前に、「この年になって、なぜ、ワシに、このようなことが……」と咽び声になっていきます。遠くに光る白い海。私を見送ってくださる孤独な姿に海風が。夢でもよい、お化けでもよいからお孫さんに会えますようにと祈らずにはいられませんでした。

気配を感じる。夢で会う、夢が癒す。癒しはどのようになされるのでしょうか。他者による慰めは慰めであって、真の癒しには届きません。その人固有のしかたでなされるものではないのでしょうか。徒に立ち入るべきでないと同時に、外傷性の悪夢であれば、時に治療的なつき合いが必要になるかもしれません。語ること・語らないことを大事にしつつ聴く

姿勢をわすれないことだと思います。

罪悪感とつき合う・つき合えないこと

生き残り方にも様々あるはずですが。人に話すこともできない生き残り方をして苦しんでいる人もいます。そのような人がいるのでカウンセリングしてほしいと依頼があり、私は受けるか断わるかで逡巡していた時でした。静岡県沼津大空襲前のときの記憶がフラッシュバックしたのです。5歳のときの記憶ですが、空襲警報とともに逃げ込んだ防空壕に爆弾投下された記憶がよみがえったのです。はじめは防空壕の奥にいたこと。母が防空壕の入り口近くにいた女学生たちに、「入り口は怖いでしょうから」と声をかけ場所交代をし、爆弾が奥に落ちたことを。直後の記憶はないので意識を失っていたのでしょうか。わかりません。大きな、大きな穴。松の幹にはりついた肉片。場所交代をしたことによる母の罪悪感は大変なものであったと思います。

まさか、幼い娘であった私が場所交代をしたときの母の言葉や茫然となっていた母親の姿まで記憶しているのを知らなかったと思います。私は幼い頃から「戦争はイヤ」「暴力が怖い」と思っていました。

人に話しても荷下ろしできない罪悪感もあり、精神の内奥にある語れないことが深いところでその人を育てていくこともあるのではないのでしょうか。

梅原猛氏は小森陽一編『3.11を生きるのびる 憲法が息づく日本へ』において、「反原発、反原発の助け合い社会を」のなかで次のように記していました。3.11からの1か月後の4月14日、菅総理大臣の使命を受けて東日本大震災復興構想会議の特別顧問に就任したこと。十数年前に「反原発」の立場から書いた文には、あまり勢いがなかったこと。なぜかというところ、これはつらいことですが、電力会社

の社長，会長を務めた方々に大変お世話になったことがあったからです。それを今非常に後悔しているのです」という勇気ある告白をしています。告白をした上で「今，原発事故を受けて，クリーンエネルギーの新しい国家に生まれ代わらなくてはならないのです」（261 頁）と述べています。

勇気には力があります。語ること・語らないことの意味，その先にあるものを考える例として，梅原猛氏をお借りして話させていただきました。人類の新しい哲学の構築へ，後 10 年生きて新しい哲学の理想を語りたいとも述べていました。

3 おわりに代えて

無事だった少女一家

1 年が過ぎた頃，消息のわからない少女一家と再会しました。彼女は小学 4 年生の時に，いじめ暴力にあい自殺を図ります。奇跡的に助かりましたが，不登校状態に。PTSD 症状で苦しみながら中学校 3 年生になっていました。

カウンセリング・相談，講演のために宿泊していたホテルに，その少女と娘の自殺を心配した両親が相談にきました。「いじめたヤツが憎い」「死にたい」と訴えます。笑みがうかぶこともありましたが「死にたい」で時間が過ぎていきました。弁護士に裁判の相談をしましたが「自殺していないので負ける」といわれたそうです。私の中でカチャと何かが切り替わりました。私は「弁護士がだめなら，国連に訴えよう」と提案しました。

「国連？」とキョトンとした少女に，私は子どもの権利条約と条約を締結した日本政府と国連子どもの権利委員会との関係，政府報告と NGO レポートとの関係を説明しました。

母親の話では猛勉強で体のことを心配して寝かせ

ようとしても「国連！」と言って耳をかさなかったとか。彼女は高校生になっていました。あの日，避難所にはいじめ加害者の男子たちがいるのではないかと怖がって，車の中で雪の降る夜を過ごしたとのことでした。高校生姿の彼女は「国連にいく頃は大学生になっているけど，行っても良いですか？」と問います。私は「子どもたちの世話役で。あなたも，あなた自身について話したら」とうれしい会話をしたのでした。

ある青年の話

もう一人，26 歳の九州のひきこもり青年の話です。何か尋常でないことが起きている。何かできることをしなければとボランティアの手続きをし，仮設住宅を訪ねて「必要なモノがありますか」と聞いて歩く役になります。何年も人と会話をしたことのない彼です。声を出さなくてもすむ記録係になります。

3 ケ月が過ぎる頃になるとボランティアの人も減り，彼は一人で仮設住宅を廻ることになってしまいます。小さな声で「何か必要な物がありますか」という彼は，「大きな声でいえ」と仮設住宅の男性に怒鳴られ，大きな声が出せるようになります。ある時，おばあさんに「あんたが欲しい」といわれ，仰天する彼に，家族全員が亡くなって独りであること，「人間を返して欲しい」「あんたでいいよ」といわれたそうです。

彼は自分でも有用なのだと思えるようになりました。彼が訪れると，「オーイ，中村君」と皆が出てきて彼の周りに輪ができ，彼は「自分も存在しても良いのだ」と思えるようになりました。

このような子どもや青年や，彼らを支えながら復興への遠い道を歩いている人たちの姿や多くの人たちの真摯な発言や振り返りを知ることによって，私

もまた、絶望をくぐって生きてきたように思います。

癒しは可能か、死者とどのように付き合うかは今
に至る課題であることに変わりありません。

横湯 園子（元北海道大学，元中央大学）